

＝ 着実に・確実に ＝

3月3日、冷たい雨の降りしきる中、38,000人のランナーが参加した2019年東京マラソン。さすがにテレビ観戦での応援となったが目を引いたのは着順以上に、東京オリンピックに向けたMGC（マラソングランドチャンピオンシップ）出場権をかけたランナーたちの自分との戦いであった。ギリギリ目標タイムを達成した選手、あと数十秒に涙した選手、「嬉しかったろう、悔しかったろう」双方の選手たちに涙ながらに拍手を送った。

ところで、「この数センチ、わずかと見るか、着実と見るか。」この広告を目にしたことはないだろうか。新幹線のデッキ等に貼られたこの広告は、2020年東京オリンピック・パラリンピックのオフィシャルパートナーをつとめる印刷会社が数センチを競う陸上競技の更新距離の実寸を表現したものである。

オリンピック選手たちは、数センチの記録更新に十数年を費やす。8年間で記録1センチを伸ばした走り高跳び、砲丸投げでは28年間で5センチ、女子三段跳びは12年間で6センチ…、とてつもない努力と時間をかけた記録である。挑戦し続け、改革を起こすことでしか新しい記録は出せない、と広告は謳う。

そのオリンピック・パラリンピックにはテレビ局ごとに応援歌が作られるが、盲目のシンガーソングライター栗山龍太さんのパラアスリート応援歌が話題を呼んでいる。「僕が伝えたいこと、それはさまざまな障がいがあってもいろんな形で、社会に還元していける存在であること、そして障がいのある僕たちだからこそ、できることがある、僕たちだからこそ、人の心を動かせるのだということなのです。曲のタイトル“リアル・ビクトリー”（本当の勝利）にこめた想いは、国籍・人種・障がいの有無にかかわらず、最善を尽くして戦いぬいた人たちが、勝負の勝ち負けを超えたその先に出会う『共に認め合える』という心。その尊い心こそが、これからの時代を動かすパワーの源であり、リアル・ビクトリーではないかと。」心に響くメッセージである。

今、障がい者（労働組合として一般的に使われる表記）基本法改定に基づいた施策が進められている。平成28年のデータによれば、障がい者の総数は、約936.6万人（人口の7.4%）。うち身体的436.0万人、知的108.2万人、精神的392.4万人が存在しているという。こうしたすべての方々を個性を尊重し、働く意欲と能力がある誰もが働ける社会をめざしていくための種々の取り組みがはじまっている。超少子高齢社会の中で、その取り組みや手段は違っても、一人一人の人格と能力と個性を大切にすることで当たり前な社会保障の担い手にもなりうる。障がい者雇用は、雇用をすることが目的ではなく、まさに労働力人口の減少の中で人財確保にもつながる取り組みとしなければならない。

労働運動において恥としなければならない三つの言葉は、「格差・差別・貧困」。その差別に関して、障がい者基本法第4条1項には、障がい者差別の禁止が定められている。だが、そうした法をつくらなければならないことこそが、私たちに投げかけられた大きな課題ではなかろうか。

もう間もなく、あの3.11東日本大震災から8度目の春を迎える。愛する家族を失い、故郷を奪っていった未曾有の災害から懸命に立ち直ろうと歩き続けた8年である。方や、未だ風評被害も絶えないとの話を聞くと、怒りを乗り越えて悲しくなるばかり。

現実を直視し、常に相手の気持ちに立てれば、差別も風評被害もきつとなくなる。長い時間がかかろうと、それはわずかではなく、着実な歩みになるはずである。

ご安全に

2019年3月4日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一